神の箱物語（サムエル記上4:1b–7:1）における逆転と転換[1]

Reversals and Transitions in the Ark Narrative (1 Sam 4:1b-7:1)

赤尾 道夫
Michio Akao

キーワード
神の箱、神の箱物語、サムエル記、逆転、イスラエルの歴史における転換

KEY WORDS
The Ark of God, the Ark Narrative, the Books of Samuel, Reversals, transitions in the history of Israel

要旨
サムエル記上4:1b-7:1のいわゆる「神の箱物語」には、事象・状況の逆転・転換が多く見出される。例えば、神の箱の登場による戦いの見込みはその結果において逆転する。また、神の箱は戦場で無力にもペリシテ人に奪われるが、ペリシテの地では逆にヤハウェが彼らとその神ダゴンに対して強大な力をふるう。更に、神の箱の喪失と共にヤハウェの栄光はイスラエルを去るが、ヤハウェの手がペリシテ人の上に重くのしかかると、彼らは状態を逆転させてその手を軽くするために、ヤハウェに栄光を帰して神の箱をイスラエルへ送り返す。このように神の箱はイスラエル人、ペリシテ人、雌牛などによって場所から場所へ運ばれるが、実際に常に物語の舞台の中心にあって状況の変化を支配しているのは、神の箱が臨在を示すヤハウェである。同様に神の箱物語そのものもサムエル記全体の広い文脈の中で、聖所や指導権などイスラエルの歴史における重要な転換の中心軸という役割を果たしている。

SUMMARY

There are many reversals and transitions in the so-called “Ark Narrative” of 1 Samuel 4:1b-7:1. For example, the prospects of the Israelites and the Philistines are reversed when the battle ends due to the arrival of the ark. Another instance is when YHWH reveals his sovereign power in the Philistine land, even as the Philistines take away the ark of God from the helpless Israelites. Furthermore, the glory of YHWH departs from Israel at the loss of the ark, but when the hand of YHWH is laid heavily upon the Philistines, they return the ark to Israel in the hope that this reversal will lighten His hand upon them. Thus, the ark is moved by the Israelites, the Philistines, and even cows, but it is still the ark that always remains at the center of the story, and it is YHWH that controls the reversals and transitions in the ark’s situation. In the same way, the Ark Narrative itself, in the broader context of the books of Samuel, functions to bring important transitions in Israel, such as shifts in its leadership and cult center.

序

サム上4:1b–7:1のいわゆる「神の箱物語」[2]は、通時的・歴史批評的研究によりサムエル記の中で特定の伝承に基づく独立した箇所とされ、また元々一つの資料であったのかどうか、本来の物語の範囲や成立年代という問題などについて議論されてきた[3]。しかし共時的・文芸批評的研究が盛んになると、テクストの成立状況がどうであったかにかかわらず、現存するこの単元を一貫した物語として捉えることが可能になり、またサムエル記のより広い文学的コンテクストの一部分として位置づけられることが認められ、その構造や主題およびサムエル記全体における役割などにも目が向けられるようになった[4]。例えば P. D. Miscall は「問い」とそれに対する「答え」あるいは「はっきりとした答えが与えられないこと」を貫かれたテーマとして物語を包括的に理解し[5]、R. Polzin は、後の王国時代、特にサム下6章と対比して、共通の構造、テーマ、言語からサム上4–6章をその前兆として読み[6]、B. Birch は物語の中で用いられている出エジプトとバビロン捕囚への比喩から、最終形態のテクストがどのような文脈で語られているのかを読み解く[7]。

本論文の目的は、こうした文芸批評的なアプローチの一つとして、逆転と転換というプロットを展開する文学的技法に着目してその機能を明らかにしながら、この物語の意義を論じることである[8]。W. Brueggemann は、サムエル記全体に根本的な社会的変革と再構成を伴うイスラエルの大きな転換を見出し、神の箱物語においてイスラエルがペリシテに敗北するという出来事に古い秩序の崩壊を見ると同時に[9]、ペリシ

テに囚われたイスラエルの神が力強く自由に振る舞うという逆転がサム上5章にあることを指摘するが[10]、物語外と物語内の逆転・転換を明確に関連づけて論じることはない。A. F. Campbell もサム上5章を敗戦という状況からの逆転の項と位置づけ、また神の箱がシロの聖所を離れて国家的レベルの表舞台から姿を消すという出来事を、国家的な権威の転換の準備の一つであると述べるが、やはりそれを物語内の逆転・転換と関連づけてはいない[11]。これらに対し、本論は、逆転と転換が神の箱物語の一部だけではなく全体において繰り返し用いられていること、更には物語内の逆転・転換が物語外の逆転・転換と相似的に呼応して、それらを生む契機となっていることを確認し、特に物語内外両方の逆転・転換が共にヤハウェの意思によってもたらされているということを指摘することにより、神の箱物語およびサムエル記という一貫した物語を形成する要素となっていることを明らかにする試みである。これにより、神の箱物語の特徴と意義を、一貫した文脈としてのサムエル記全体において捉えなおしたい。

そのため、まず物語の単元の範囲と直近の文脈について論じ、それから物語内に見られる逆転と転換の用例を取り上げて考察し、最後に神の箱物語がサムエル記全体の文脈の中でどのような機能を持っているかについて述べる。

神の箱物語の範囲と文脈

サム上 4:1b-7:1 は場面・登場人物・状況の設定などによって、前後の物語からはっきりと区切られる。それにもかかわらず、神の箱物語とその直前の話には連続性が見られる。例えば、サム上2章に見られるエリの息子たちの悪行への言及（2:12–17, 22–25）は、なぜヤハウェの怒りが引き起こされ、なぜイスラエルの上に祭司に至るまで悲劇が襲いかかり神の箱までも失われたのかを説明するものであり、既になされたエリの家に関する預言の成就がこの物語に見られる[12]。また、サム上3:2–18と4:12–18は、以下のように明らかに共通の語彙と構造を有しており、神の箱物語とその前の章との文学的連続性を示している[13]。

3:2 エリは自分の場所に着いている	4:13 エリは自分の席に座っている
3:4 耳障りな事を告げるためにヤハウェがサムエルを呼ぶ	4:10–11 イスラエルは打ち負かされる
3:5 サムエルがエリのもとに走ってくる（וירץ）	4:12–13 ベニヤミン族の男がシロに走ってくる（וירץ）
3:11–14 エリが見えないので理解しないことを、ヤハウェはサムエルに明らかにする（3:2 לא יוכל לראות）	4:14–15 エリは見えないので、何が起こっているか分からない（ולא יכול לראות）

3:16–17 エリは神が何を告げたのか知ろうとしてサムエルに尋ねる	4:16 エリは何の知らせなのかと尋ねる
3:18 サムエルはすべてを告げる（ויגד）	4:14 伝令の男は何が起こったかをエリに告げる（ויגד）
3:18 サムエルが明らかにしたメッセージ	4:17 メッセージの内容

一方で、サム上4:1b–7:1は前後の物語とは異なった特徴を持つ。まず、「箱」というこの物語の主要なモチーフは前後の話にはほとんど現れない。3:3で神殿に安置されていたことが触れられているだけである。1章から3章はサムエルの台頭をその主な内容としており、彼の誕生を準備するハンナ物語、サムエルの奉献、サムエルとエリの息子たちの対比、サムエルに臨むエリの家に対するヤハウェの言葉などが語られる。これらの出来事が起こる場所はシロであり、エルカナはエリとその息子たちがいたシロに毎年上り（1:3）、ハンナはシロの神殿で祈って誓いを立て（1:9）、サムエルはシロのヤハウェの家にささげられ（1:24）、エリの息子たちはシロに詣でる人々に対して祭司の権利を乱用し（2:14）、ヤハウェはシロでサムエルに自身を示した（3:21）。

サム下4:1aの連結文（「サムエルの言葉は全イスラエルに及んだ」）は3:19–21を要約し、サムエルの権威が広く認められていたことを明らかにしている[14]。しかし、この後4章から6章までサムエルは一切登場しない。場面は突然、戦場へと転換し、イスラエルはエベン・エゼルに、ペリシテ軍はアフェクに陣を敷いたことが述べられる（4:1b）。エベン・エゼルとアフェクはシャロン平野の南端、エフライムの山地の西に位置する[15]。こうして物語の視野はシロとイスラエルの外へと広げられている。しかし物語上、神の箱が当初置かれているのはシロであり（4:3）、この設定は先行する物語から引き継がれている（3:3）。

神の箱物語は、箱がアビナダブの家に運び込まれ、その息子エルアザルによって守られたことを報告して終わる（7:1）。その後、7:2は前節の設定を引き継ぎながら、新しい時間設定・場面を導入する[16]。二十年がたち、サムエルは今や十分に成熟してイスラエルの家の全体に対して語りかけ（7:2f）、ミツパでイスラエルに裁きを行うようになっている（7:6）。そして7章の終わりは、サムエルがベンヤミンの地であるベテル、ギルガル、ミツパ、ラマで士師として生涯を送ったことを簡潔に述べる（7:15–17）。

サムエル記全体のコンテクストにおいて、神の箱を「丘の上のアビナダブの家に」（7:1）運び入れるのは、ダビデがそれを「丘の上のアビナダブの家から」（サム下6:3）エルサレムへ向けて運び出すための設定を準備している。しかしサム下6:2によれば神の箱があったのはバアレ・ユダであり、その場所をキルヤト・エアリムとするサム

上7:1の記述とは異なっている[17]。また、アビナダブの息子（たち）の名前も異なっている。サム上7:1によればエルアザルであるが、サム下6:3では二人の息子、ウザとアフヨの名が挙げられている。もっとも、この違いは必ずしも矛盾するものとは限らないかもしれない[18]。

サム上4–6章の登場人物の中に、その前後では主要な人物であるサムエルは現れない。ここでの中心的な「役者」は神の箱であり、神の箱がキルヤト・エアリムに運ばれ、安置されたときに初めてサムエルは物語の舞台に戻ってくる[19]。しかし、前後の3章と7章でヤハウェの言葉を聞いてイスラエルに語っているサムエルがいないこともあり、ヤハウェ自身の言葉が語られることはない[20]。エリ（4:13–18）とその息子たち、ホフニとピネハス（4:4, 11）は引き続き登場するが、彼らの人物像は1–3章に現れるものとは少し異なっているように見える。2:12–17にあるようなエリの息子たちの罪への批判的な記述はここには見られない。エリは祭司としてしか描かれていなかったが、彼が死んだときには、四十年間士師としてイスラエルを裁いたことに言及されている（4:18）。しかし、サムエル記のより広いコンテクストにおいては、4章においてエリの家に起こること、すなわち彼らの死は、2章で述べられている彼らの悪行に対する当然の結末であり、神のエリへの言葉（2:27–36）とサムエルへの言葉（3:11–14）の実現であるように理解できる。もっとも、エリへの預言において、エリ自身の死や神の箱が失われることについては全く触れられていない。その他、両方に登場する人物について、いくつかの共通の性質が見られる。たとえば、エリはシロに住んでおり（1:3; 4:12f）、また彼は目がよく見えなくなっていた（3:2）のが、今や完全に視力を失ってしまっている（4:15）。

ペリシテ人はサムエル記において4章で初めて登場する。4章以前には、シロを舞台としてエリの家およびその下働きとサムエルの家族を除くと、シロに詣でるイスラエルの人々（2:14）しか現れないが、神の箱物語への移行部分である3章の終わりには、サムエルがヤハウェの預言者であるということを「ダンからベエル・シェバに至るまでのイスラエルのすべての人々」が認めた、として物語の範囲が広く拡大されている（3:20）。サムエルの預言者としての役割もここで新しく持ち出されており、祭司エリのもとでヤハウェに仕え（2:11）エフォドを着て（2:11）あたかも祭司見習いのようであったことからすると、大きくその性格を変えている[21]。いずれにしろ、より大きな集団としての人々が表舞台に登場し、家族内もしくは一地域の出来事がより大きな事件に取って代わられ、二つの民の間に戦いが起こる。ペリシテ人と戦ったのは、一つあるいは少数の部族ではなく、イスラエルであり（二つの戦いで討たれた兵士の人数を参照。4:2, 10）、またイスラエルの長老たちが重要な決断を下す権威を持っている（4:3）。

イスラエル全家とペリシテ人は7章にも引き続き登場するが、ペリシテ人に関する描写は4–6章のそれとかなり異なっている。彼らはイスラエルと戦ったが、イスラエルの神の力を認め、恐れていて（4:6–9; 5:7など）栄光を帰していた（6:5）。このようなペリシテ人の様子は7章ではまったく見られない。ペリシテ人は4–6章においてはより活発な言動を見せており、それは特に神の箱を扱うにあたって顕著であるが、7章では彼らの発言には一切言及されていない。彼らは単にイスラエルが戦っている相手としてしか描かれず、言葉もなく打ち負かされるだけである（7:10）。彼らは文字通り「鎮められた」（7:13）。また、4:1ではイスラエルがペリシテに向かって出撃したが、7章ではペリシテ人がイスラエルに攻め込んでいる（7:7, 10）。

以上のように、サム上4:1b-7:1のいわゆる「神の箱物語」は、場面設定や登場人物などを比較すると前後の記事とは明確に区別されるが、完全に断絶した物語でもない。幾人かの人物は、多少異なる性格を持って引き続き登場する。また、いくつかの出来事は以前に起こったことの帰結や既に預言されたことの実現であり、また他の出来事は、後に起こることに何らかの形でつながっている。このようにこの物語は独自の性格を持ちながら、同時にサムエル記全体の文脈の中にとりこまれている。

神の箱物語に見られる逆転と転換

神の箱物語の中で起こる出来事には、いくつもの逆転と転換が見られる。イスラエルが最初にペリシテ人に敗れた後、イスラエルの長老たちは、ヤハウェが敵から自分たちを救ってくれることを期待して、神の箱をシロから運んでくることにした（4:2）。このことが、物語の歴史的な領域から神学的な領域への転換を生み、領土の争いを宗教の争いへと転換させている[22]。

物語の転換		戦いの性質の転換
歴史的		領土的
↓	神の箱が戦場に運び込まれる	↓
神学的		宗教的

「なぜヤハウェは今日、我々がペリシテ軍によって打ち負かされるままにされたのか」（4:3）という長老たちの問いは、この戦いを左右するのがイスラエル人でもペリシテ人でもなくヤハウェである、という彼らの理解を明らかにしている。神の箱が陣営に到着すると、全イスラエルは戦いに勝利することを期待して歓声を上げ、一方ペリシテ人は、エジプトを撃ったイスラエルの神の手によって自分たちも打ち負かされ

るのではないかと恐れた（4:4–9）。しかし、この両者の見込みは、第二の戦いにおいてヤハウェの臨在のもとに完全に逆転することになる[23]。

イスラエルの見込みの逆転		ペリシテ人の見込みの逆転
ヤハウェによる救いを期待（4:3）		ヤハウェに打ち負かされるのを恐れる（4:7–9）
↓	神の箱の到着と臨在	↓
ペリシテ人に打ち負かされる		イスラエルを討つ

この両者の見込みの逆転は、戦いという舞台の背後で実際に動いている主要な役者がヤハウェであることを示している。長老たちは「なぜヤハウェは我々が打ち負かされるままにしたのか」と問うことによって、一見それに応えるヤハウェの言葉を必要としているように聞こえるが、実際にはそれを求めようとはせず、自分たちの意思で神の臨在のしるしである神の箱を運び、それによって問題を解決して戦いに勝利しようとする[24]。しかし、戦いが人ではなく神のものであると知りながら、神の力を人の手で操作しようとする試みはくじかれてしまう。彼らの望みは裏切られ、その勝利は実現しない。ヤハウェの臨在があったとしても、ヤハウェ自身がそれを望んでいないからである[25]。再びペリシテ人と戦ってイスラエルは打ち負かされるが、倒された兵士の数は最初の戦いの時よりもはるかに多く、何より神の箱が奪われてしまう（4:10f）。この逆転の結末の重大性は、エリの二人の息子の死と、イスラエル軍は最初の戦いの後には陣営に戻っただけだったが（4:3）、二度目の戦いの後にはそれぞれの天幕に逃げ帰った（4:10）という事実によって強調されている。すなわち、それは単なる陣営への退却だったのではなく、戦線からの完全な離脱だったのである[26]。

敗戦の重大さは、更にその後に続く出来事によって明らかにされている[27]。伝令が戦線からシロに来て神の箱が奪われたことを告げたとき、町全体は絶望の叫び声を上げたが、その叫び声を聞いたエリは「この騒々しい声は何だ」と尋ねた（4:13f）。これは神の箱の陣営への到着にイスラエルが力づけられて歓声を上げ、一方ペリシテ人が「ヘブライ人の陣営にどよめくあの大歓声は何だろう」と言った戦場での出来事（4:5f）の逆転である[28]。

4:5f		4:13f
神の箱が陣営に到着して		神の箱が奪われたことを知って
全イスラエルは歓声を上げる	逆転 →	シロの町全体は叫び声を上げる
ペリシテ人は言った		エリは言った
「あの大歓声は何だろう」		「この騒々しい声は何だ」

こうして神の箱の臨在による喜びの叫びは、神の箱の喪失による絶望の叫びへと変わっている。ここで伝令がエリに戦場での惨敗と二人の息子の死を報告するが、最後に神の箱が奪われたと告げられると、エリは門のそばの自分の席から落ちて死んでしまう（4:17f）[29]。エリの息子の嫁であるピネハスの妻は、神の箱が奪われ、しゅうとも夫も死んだと聞かされて陣痛に襲われ、子を産む（4:19f）。彼女は「栄光はイスラエルを去った」と言ってその子をイカボドと名付ける（4:21）[30]。神の箱の喪失は4:19と4:21の両方で触れられているが、いずれの場合もエリとピネハスの死に先立ってまず言及されている。更に、ピネハスの妻が4章の最後に語る言葉の中では、夫や義父の死や敗戦については触れられておらず、神の箱の喪失についてだけ語られている（4:22）。同様にエリが最初から気に掛けていたのは戦いのことでも息子たちのことでもなく、神の箱のことであった（4:13）[31]。したがってこの章の最も重要な関心事は、2–3章で預言が向けられていた個人の生死でも家の存続でもなく（もっともそれも象徴的なことではあるけれども）、神の箱がどうなったのか、ということなのである[32]。

5章になると物語の舞台はイスラエルのシロからペリシテのアシュドドへと移され、また同時に物語の主体もイスラエル人からペリシテ人に変わっている[33]。

物語の舞台の転換	物語の主体の転換
神の箱があったイスラエルのシロ	イスラエル人
↓	↓
神の箱があるペリシテのアシュドド	ペリシテ人

この転換は神の箱がある場所の変化に伴って起こっており、したがって神の箱が舞台の中心に位置し続ける。シロからエベン・エゼルに神の箱を持ってきたのはイスラエルであったが（4:3）、ここではペリシテ人がエベン・エゼルからアシュドドまで運んでいる（5:1）。5章の最初の部分（5:1–5）は4:1b-11の逆転である。ちょうどイスラエル人とペリシテ人の間に戦いがあったように、今や二つの祭儀の対象の間で、すなわち神の箱とダゴンの像の間で戦いが起こるが、これは実は二つの神自身による戦いである。二つの民の間に二回の戦いがあったように、ヤハウェとダゴンとの間にも二回の戦いが起こる。しかし神の戦いは民の戦いを単純に反映したものではなく、政治的・軍事的な力関係は、神学的に覆される[34]。神の箱はダゴンの神殿に運び込まれ、ダゴンのそばに置かれた（5:2）[35]。実際この夜に何が起こったかについては描写がされていないが、翌朝アシュドドの人々が神殿に来てみると、ダゴンがヤハウェの箱の前の地面に倒れていた（5:3）。これは、ペリシテ人の前にイスラエルの兵士たちが倒れた敗戦（4:2）の逆転である。そして、第二の戦いでイスラエルの敗北がより凄惨

であったのと同じように、二日目の朝、ダゴンは更にひどい状態で打ち負かされる。ダゴンは単に最初の朝と同じようにうつぶせになって箱の前で地面に倒れていただけではなく、頭と両手を切り取られて胴体だけが残されていた（5:4）。ヤハウェの民であるイスラエルはペリシテ人の前に倒れたが（4:10）、逆にペリシテ人の神であるダゴンはヤハウェの箱の前に倒れたのである（5:3f）。この事実は明らかに、4章におけるペリシテ人のイスラエルに対する勝利がヤハウェの弱さによるものではなく、逆にその意思と力によるものであることを示している[36]。

イスラエルとペリシテ人の戦い		ヤハウェとダゴンの戦い
四千のイスラエル軍兵士が		ダゴンが
ペリシテ軍の前に倒れた（4:2）		神の箱の前に倒れた（5:3）
↓	逆転 →	↓
三万のイスラエル軍兵士が倒れ、		ダゴンが神の箱の前に倒れ、
神の箱が奪われた（4:10）		頭と両手が切り取られた（5:4）

ダゴンが倒れたのは、士師であったエリの死の逆転でもある。イスラエルの指導者の死は、イスラエルの敵であるペリシテの神の死へと逆転させられるが、エリが席から落ちて首を折って死んだように、ダゴンはまさに頭を切り取られて倒れ落ちた（4:18）[37]。

エリ		ダゴン
神の箱が奪われたとき、		神の箱が運び込まれたとき、
イスラエルの士師は	逆転 →	ペリシテ人の神は
彼の席からあおむけに落ち、		うつぶせに地面に倒れ、両手と
首を折った（4:18）		首を切り取られていた（5:4）

ダゴンが神の箱の前に倒れた後、ヤハウェはペリシテの神のみならず、その民をも腫れ物をもって打ったが（5:6, 9, 12）、これもエベン・エゼルでイスラエルがペリシテ人に打たれたことの逆転になっている[38]。神の箱がイスラエルの陣営に運ばれてきたとき、ペリシテ人はエジプトを打った強力な神の「手」を恐れたが（4:7–8）、イスラエルは彼らを打ち負かすことはできなかった。それに対し、ここでは実際にヤハウェの「手」が彼らの上に重くのしかかり、死をもって打ったので（5:6f, 11）、ペリシテ人は災難から逃れるために神の箱をアシュドドからガトへ（5:8）、そしてエクロンへ（5:10）と運んだ[39]。

神の箱がイスラエルの陣営に運ばれる（4:5）		神の箱がアシュドドに運ばれる（5:1）
↓		↓
ペリシテ人はヤハウェの手を恐れる		ヤハウェの手が重くのしかかる
しかし	逆転	そして
ペリシテ人がイスラエルを打つ	→	ヤハウェはアシュドドの人々を打つ
↓		↓
神の箱がアシュドドに運ばれる		神の箱がアシュドドから運ばれる

このように、ヤハウェの手はエベン・エゼルの戦場ではペリシテ人を打たなかったが、今やその手は彼らを彼ら自身の土地において打つ。神の箱が陣営に運び込まれてもイスラエルは敗れたが、今やペリシテ人は打たれ、神の箱が運び出される。4章では神の箱は奪われ、無力でなすがままにされていたかに見えたが、こうして5章では、ヤハウェの比類なき力が思うままにふるわれるという逆転が起こるのである[40]。そしてそこには、イスラエルの長老たちは神の箱を自動的に救いをもたらしてくれる、いわば魔術的な道具のように扱ったが、ペリシテ人たちは神の箱と自身の意思を持って行動するヤハウェの手を結びつけるという、神の箱についての認識の逆転も見出すことができる[41]。また同時に、切り取られたダゴンの無力な手（5:4）がヤハウェの力強い手に逆転させられている。これらの逆転によって、事象を支配しているのが人ではなくヤハウェであるということが強調される。

ヤハウェの箱は七ヶ月間ペリシテ人の地にあり（6:1）、その間彼らを苦しめることとなった[42]。彼らは祭司たちと占い師たちに相談し、この箱をどう扱うべきか、どのようにして元の場所に送り返すべきか、と尋ねた（6:2）[43]。ペリシテ人はイスラエルから神の箱を奪ったが（5:1）、それを元の場所に送り返すことを考えている。古代オリエント世界において敵の神（々）を奪うことは完全な征服の証しと理解されていたので、神の箱を返すことはペリシテ人のイスラエルに対する勝利をくつがえす行為を意味し、宗教的、政治的な敗戦を意味するものであった[44]。したがって、神の箱が移動する方向が逆になるとき、戦いの結果も逆になるのである。

戦いの後に神の箱を奪う		災厄の後に神の箱を送り返す
イスラエル		ペリシテ人の地
↓	逆転 →	↓
ペリシテ人の地		イスラエル
神の箱を手に入れることは		神の箱を失うことは
ペリシテ人が勝利した証し		ペリシテ人がヤハウェに敗れた証し

占い師たちと祭司たちは、神の箱を何も添えずに送り返さないように、むしろヤハウェに賠償の捧げ物（אשם）として、災厄を受けたペリシテの領主の数に合わせて五つの金の腫れ物と五つの金のねずみをささげるようにという助言を与える（6:3–5）。つまりペリシテ人たちは、自分たちの上にのしかかるイスラエルの神の手が軽くなるように（6:5）、彼らを苦しめるヤハウェの重い手（5:6）が逆転されるようにと願って、災厄と引きかえに賠償の献げ物をするよう勧められているのである[45]。彼らはこの賠償の献げ物を「イスラエルの神に栄光（כבוד）を帰すること」と考えており（6:5）、それはすなわち神の箱が奪われたときに「栄光がイスラエルを去った」（4:22）ことの逆転となっている。

神の箱の喪失		ペリシテ人の期待
ヤハウェの栄光（כבוד）が		ヤハウェに栄光を帰して
イスラエルを去る		神の箱をイスラエルに送り返す
↓	逆転 →	↓
ヤハウェの重い（כבד）手が		ペリシテ人の上にのしかかる、
ペリシテ人にのしかかる		ヤハウェの手を軽くする

祭司たちは人々に、新しい車を準備し、神の箱と金の品物（כלי הזהב）[46]を載せて二頭の雌牛に引かせ、行くがままにしてイスラエルの領地であるベト・シェメシュへ行くかどうか、すなわちヤハウェが彼らを打ったのかそれとも偶然の災難だったのかを確認するようにと勧めた（6:8f）。5章で人々はペリシテの領主に対して、神の箱を送り返すよう求めているが、それは、そうしさえすればイスラエルの神が彼らにもたらしている死を免れることができるという確信に基づいていた（5:11）。しかしこの見解は、6章では不確かなものに転換している[47]。今や、彼らが神の箱を送り返すのではなく、それが戻っていくかどうかはヤハウェ自身の意思にかかっており、箱を運ぶ雌牛の行く先がその神託を告げるものとされている。ペリシテ人は占い師たちと祭司たちの指示に従って準備をし、雌牛と車は右にも左にもそれることなく、まっすぐに

ベト・シェメシュに向かっていく（6:10–12）。ペリシテの領主たちは後をつけて行って、この占いの結果がどうなったのかを確かめ、彼らの献げ物が受け入れられたかどうか証人となるという役割を担う[48]。

その後6:13では、神の箱の移動によるペリシテ人の領地からイスラエルの地へという舞台の転換に伴って、再び物語の主体がペリシテ人からベト・シェメシュの人々に転換している。ベト・シェメシュの人々が箱を見た（וראו את הארון）のは小麦を刈り入れていたときであったが、神の箱を見ただけで彼らは喜び、ヤハウェに焼き尽くす献げ物やいけにえをささげた。神の箱がイスラエルの地に戻ったということは、換言すれば、ヤハウェが今やイスラエルの人々と共にあるということだからである。これは神の箱が奪われたときにイスラエルの人々が見せたのとは全く逆の反応である。神の箱が失われたという知らせを受けたとき、シロの町全体は叫び声を上げ（4:13）、エリは驚きのあまり死んでしまい（4:18）、ピネハスの妻はヤハウェの栄光がイスラエルを去ってしまったという絶望の中で子を産んだ（4:19–22）。

神の箱の喪失		神の箱の帰還
箱が奪われたという知らせを聞く		箱が戻ってきたのを見る
↓	逆転 →	↓
絶望の叫び声を上げる		献げ物をささげて喜ぶ

神の箱を載せた車はヨシュアの畑に「止まった」（6:14）が、それはすなわちヤハウェがこの場所を神の箱がたどる行程の目的地と定めた、ということを示す[49]。そこで、ペリシテの領主たちはそれを見て（ראו）自分たちに降りかかった災厄が間違いなくヤハウェの手によるものであったと知ることとなった。敵である外国人までもがヤハウェの支配する力を認め、彼らの地で起こったすべてのこともイスラエルの神によるものであると悟ったのである[50]。レビ人たちが神の箱を下ろし、人々が役目を終えた車の木材を割って雌牛を焼き尽くす献げ物としてささげ、ペリシテの領主たちがエクロンへ戻っていったという一連の出来事もまた、この神の箱の旅程が明確にここで終わっていることを示している[51]。ペリシテ人とイスラエル人、両方の民がヤハウェの力を目撃して証人となり、「神の箱の帰還を見」て、その結末に満足する。

こうして神の箱の帰還を見届けたペリシテ人は物語の舞台から退場するが、実際には彼らの地で起こった出来事の連鎖は、適切な結末を迎えたわけではない。ペリシテの地において神の箱がたらい回しにされる先々で災厄が起こり、そのため彼らは神の箱の扱いに困り、災厄がヤハウェによるものなのかどうかを知るために雌牛に引かせて送り出し、神の箱がイスラエルに帰還したというところまでは良いのであるが、ペ

リシテでの災厄がそれで鎮まったのかどうかについては語られないまま、問題の解決が見られたのかどうかは読者に知らされないままである[52]。したがって、この物語の中では、神の箱がもはや関係しない、既に立ち去った場所での出来事は重要ではなく、常に神の箱を中心として起こる出来事に目が向けられている。

6:19–7:1の物語は読者を困惑させる。ヤハウェはベト・シェメシュの人々を打ったが（ויך באנשי בית־שמש）、それは「彼らが箱を見た」（ראו בארון יהוה）からであった(6:19)[53]。しかし6:13で人々は既に神の箱を見ている（ויראו את הארון）。いずれにしろ、神の箱を見ることによってもたらされた喜びは、神の箱を見ることによって引き起こされた悲嘆へと逆転させられている。エベン・エゼルの戦いでの大きな打撃（המכה גדולה）は神の箱の喪失をもたらしたが（4:10f）、ここでは神の箱の帰還が大きな打撃（מכה גדולה）をもたらす（6:19）。

エベン・エゼルでの打撃		神の箱の帰還
↓	逆転	↓
神の箱の喪失	→	ベト・シェメシュでの打撃

彼らが打たれた具体的な理由が何であれ、ペリシテ人の地でそうであったように、今やイスラエルの地において、ヤハウェはその臨在のしるしである神の箱を通して力を示す[54]。こうして現された神の力に対するベト・シェメシュの人々の反応は、疑問の形を取って現れる。「この聖なる神、ヤハウェの御前に誰が立つことができようか。我々のもとから誰のもとへ行っていただこうか」(6:20)。これらの疑問は、かつてペリシテ人が発した「あの強力な神の手から我々を救える者があろうか」(4:8）や「イスラエルの神の箱をどうしたものか」(5:8)、あるいは「ヤハウェの箱をどうしたものでしょう。どのようにしてあれを元のところに送り返したらよいのか、教えて下さい」(6:2）といった疑問に類似している。こうして、疑問の形を取ったヤハウェの強大な力に対する同様な認識は、皮肉にも敵であるペリシテ人の口からヤハウェの民であるイスラエル人の口へと転移され、共有される[55]。

ペリシテ人の反応		ベト・シェメシュの人々の反応
「誰が神の手から我々を救えるのか」		「誰がヤハウェの前に立てようか」
「神の箱をどうしたものか」		「誰のもとへ行っていただこうか」
	話者の転換 →	

その後、神の箱はキルヤト・エアリムの丘の上にあるアビナダブの家に移される

が、この場所は通常の、あるいは中央の聖所ではなかった[56]。ベト・シェメシュの人々はキルヤト・エアリムの住民に助けを求め、大きな打撃の後に神の箱を移すよう頼んだが、それはまさにアシュドドの人々がペリシテの領主たちに助けを求め、ヤハウェによって腫れ物の災厄で打たれた後に神の箱をエクロンへ移したのと同様の行為であった（5:6–8）[57]。このこともまた、ペリシテ人とイスラエル人の両方に対して等しく現されたヤハウェの力を強調している。誰も神の箱を、すなわちヤハウェをコントロールすることはできず、誰の手にも余るものとなってしまう。結果、この後神の箱はダビデによってエルサレムに運び込まれるまで、表舞台から姿を消すことになる[58]。

サムエル記における神の箱物語

既に述べたように、神の箱物語はそれ自体として一つの構成単位となっているが、また同時にサムエル記全体の流れの中に統合されている。そして、逆転と転換のプロットを多く内包するこの物語自体が、サムエル記の大きな文脈において、より大きな逆転と転換の変化の節目として機能している。1–3章ではシロが祭儀の中心的な場所であり、神の箱もその神殿に安置されていたが（3:4）、最終的にその役割はエルサレムに移されることになる。この聖所の転換は、一旦神の箱がペリシテ人に奪われ、イスラエルに戻った時にシロや他の聖所には行かず、一時的にアビナダブの家に留め置かれたために起こる（7:1）。これによっては神の箱の適切な安置場所という問題が解決しないため、後にダビデが神の箱をそこから最終的な目的地であるエルサレムへと運び込む必要性を生じさせるからである（サム下6章）[59]。

神の箱の安置場所

サム上1–3章	神の箱物語	サム下6章
シロ →	エベン・エゼル → ガト → アシュドド → エクロン → ベト・シェメシュ → アビナダブの家	→ エルサレム

祭司の系譜についても同様に、神の箱物語を挟んで大きな転換が見られる。サム上2:27–36のエリの家に対する託宣は、何故このシロの祭司の家系がダビデの都に据えた新しい宗教的中心地で神殿に仕えることができなかったか（列王上2:27）を説明するものであるが、神の箱とエリ家の祭司の衰退を関連づける神の箱物語が、シロとエルサレムの祭司の転換の間を埋めている[60]。

エリの家はシロでヤハウェに仕える祭司の家系であり（1:3）、エリ自身は四十年間士師としてイスラエルを裁いたが（4:18）、神の箱が奪われたという知らせを聞いて死んでしまい、また彼の息子たちも戦いの中で倒れてしまったため、彼の見習い祭司であったサムエルが次代の指導者となってイスラエルを裁くことになる（7:15f）[61]。これ以降、イスラエルに士師が現れることはなく、サムエルはキングメーカーとしてサウル（10:1）とダビデ（16:13）に油を注ぎ、彼らをイスラエルの新しい指導者、王とする。実際、エリは王的な人物のように描かれており、彼がその「座」から落ちた（4:18）という出来事はダビデ王朝の登場を予期させる[62]。

イスラエルの指導者

神の箱物語

エリ → [エリとその息子たちの死] → サムエル → サウル → ダビデ

（キングメーカー）王制の導入

また、シロ（4:4）からキルヤト・エアリム（7:1）までの神の箱の旅は、神の栄光がエリのもとにあるイスラエルを去り、サムエルの指導権が確立するイスラエルに帰ってくるということを表すと同時に、後にすべての敵に勝利して王権を確立したダビデのもとで行われる、バアレ・ユダからエルサレムまでの神の箱の旅（サム下6章）を予示するものである[63]。神の箱はヤハウェのイスラエルにおける臨在とイスラエルそのものを象徴するものであるが故に、イスラエルとその神を扱うのにふさわしい指導者とふさわしい場所に関する問いの両方（「この聖なる神、ヤハウェの御前に誰が立つことができようか。我々のもとから誰のもとへ行っていただこうか」[6:20]）を関連させて生じさせるからである[64]。イスラエルの敵の神、ダゴンは神の箱の前に立っていることはできず、また神の箱はペリシテ人の地に安住することはできなかった。聖書全体の中で、祭司と王だけが神の箱の前に立つことができるとされているが、サムエル記の中で、神の箱がエルサレムに運ばれるときにヤハウェの前で楽器を奏で、踊り、跳びはね、献げ物をささげているのはダビデである（サム下6:5, 14, 16, 17, 21）[65]。このように、神の箱物語は祭儀の中心的な場所とイスラエルの指導権の両者が転換する変わり目となっており、また新しい聖所とそれを建てる指導者がヤハウェの支配のもとに確立されていることを明らかにするのである[66]。

結論

神の箱物語において、神の箱は場所から場所へと運ばれている。まずシロに置かれ

ていたが、戦場であるエベン・エゼルの陣営にホフニとピネハスと共にやってきた（4:4）。その後、戦いに勝利したペリシテ人に奪われて彼らの地、アシュドド（5:1）に運ばれ、それから災厄に悩まされた町の住民によってガト（5:8）、更にエクロン（5:10）へと移された。扱いに困ったペリシテ人は神の箱を自分たちの領内から送り出すことにし、箱はベト・シェメシュへ来たが（6:14）、ここでも災難が引き起こされ、キルヤト・エアリムの人々によってアビナダブの家に運ばれて、彼の息子エルアザルによって守られることとなった（7:1）。このように神の箱はイスラエル人によって、またペリシテ人によって、更には雌牛によって様々な場所へ運ばれたが、しかし箱がどこに行くか、それによって何が引き起こされるかをコントロールしていたのがヤハウェ自身であるとされていることは明らかである。このヤハウェの強大な力は、直接的・間接的な出エジプトのモチーフと共に用いられている逆転と転換という文学的な技法によって示され、強調されている。イスラエルはヤハウェの力を頼りにしていたので神の箱を戦いの場へと持ち込んだが、しかしヤハウェの言葉を求めず、神の箱を道具として利用しようとしたために、その思惑は覆される。イスラエルは神の箱の臨在にもかかわらず戦いに敗れたが、逆にペリシテ人の地では彼らの神ダゴンは神の箱の前に倒れた。それにより、ペリシテ人は、彼らが戦いに勝ったのはヤハウェが弱くて彼らの神と彼ら自身がまさっていたからではなく、ヤハウェがそうなるよう意図したからだと思い知らされる。イスラエル人が戦いに倒れたのがペリシテ人が災厄に倒れたことへと逆転させられたのは、ペリシテ人も悟ったように、ヤハウェの神の箱がそこにあったからである。そして神の箱は奪われてイスラエルを去ったが、誰の手も借りずにイスラエルの地に帰ってきた。更にイスラエルに戻ってからも、神の箱は人々の手に余るものとされ、なぜ災難が降りかかるのかという理由さえ説明がつかない。神の箱は「旅」する先々でその力を示し、神の箱が臨在するどの地も確かにヤハウェの支配のもとにあることを明らかにするのである[67]。

このように、状況を逆転させるほどのヤハウェの力はイスラエルの内側でも外側でもあらわされ、イスラエル人も非イスラエル人もその証人となっている。また神の箱とヤハウェの力を支配下に置いて利用しようとする試みはすべて失敗に終わっている。こうして神の箱は常にこれらの逆転と転換の中心に位置し続け、ヤハウェがその変化を引き起こしている者であることを示すが、サムエル記全体の広い文脈の中でも、イスラエルの指導者と聖所という更に大きな転換をもたらす中心軸の機能を果たしている。したがって、神の箱は神の箱物語とそれを中心としたより大きなサムエル記の物語において、ヤハウェの臨在の象徴として、世界の秩序を変え、歴史を支配するヤハウェの力を表しているのである。

注

1　本稿は、2017年9月29日、30日にルーテル学院大学にて開催された日本基督教学会第65回学術大会で行った研究発表を加筆修正したものである。

2　この神の箱物語において「箱」は、「ヤハウェの契約の箱（ארון ברית יהוה）」（4:3, 5）、「万軍のヤハウェの契約の箱（ארון ברית יהוה צבאות）」（4:4）、「神の契約の箱（ארון ברית האלהים）」（4:4）、「ヤハウェの箱（ארון יהוה）」（4:6; 5:3, 4; 6:1, 2, 8, 11, 15, 18, 19, 21; 7:1［2回］）、「神の箱（ארון אלהים）」（4:11）、「神の箱（ארון האלהים）」（4:13, 17, 18, 19, 21, 22; 5:1, 2, 10［2回］）、「イスラエルの神の箱（ארון אלהי ישראל）」（5:7, 8［3回］, 10, 11; 6:3）、「箱（הארון）」（6:13）など様々な名で呼ばれている。「契約」を含む名称が4:3–5に、「神の箱（ארון האלהים）」が4:13–5:2に、「イスラエルの神の箱」が5:7–6:3に、「ヤハウェの箱」が6:1–7:1に集中している、ペリシテ人の発言の中では「イスラエルの神の箱」が多く使われたりするなど、各々の名称の使用についてある程度の傾向は見られる。しかし、こうした用法は一貫している訳ではなく、箱の名称の使い分けの境目やそれぞれの意味の違いは明確ではない。

3　L. Rost (*Die Überlieferung von der Thronnachfolge Davids* [BWANT 42; Stuttgart: W. Kohlhammer, 1926]) 以降、サム上4–6章はサムエル記のその他の物語とは区別される一つの伝承をなしていたと論じられてきた。Rost およびその前後の学者たちによるこの箇所についての通時的な様式研究・伝承史研究については、A. F. Campbell, *The Ark Narrative (1 Sam 4–6; 2 Sam 6): A Form-Critical and Traditio-Historical Study* (SBL Dissertation Series 16; Missoula: Scholars Press, 1975) 6–54を参照。

4　R. P. Gordon, *1 & 2 Samuel* (Old Testament Guides; Sheffield: Sheffield Academic Press, 1984) 33f; Y. Gitay, “Reflection on the Poetics of the Samuel Narrative: The Question of the Ark Narrative,” *CBQ* 54 (1992) 221–230. 神の箱物語の主題や申命記的歴史における位置づけに加え、捕囚期のイスラエルという視点からこの題材がどのように読まれたか、という問題も最近の研究の対象となっている。その他、近年の共時的・文芸批評的な「神の箱物語」研究の動向については、K. Bodner, “Ark-Eology: Shifting Emphases in ‘Ark Narrative’ Scholarship,” *Currents in Biblical Research* 4 (2006) 169–197 を参照。

5　P. D. Miscall, *1 Samuel: A Literary Reading* (Bloomington: Indiana University Press, 1986) 26–36.

6　R. Polzin, *Samuel and the Deuteronomist: A Literary Study of the Deuteronomic History: Part Two: 1 Samuel* (San Francisco: Harper & Row, 1989) 55–79.

7　B. Birch, “The First and Second Books of Samuel” in L.E. Keck (ed.), *New Interpreter’s Bible, volume II* (Abingdon: Nashville, 1998) 995–1014.

8　物語における「逆転」とは、主要な登場人物の運命が急変することである。逆転はプロットの構造の一部として、クライマックスにおいてあるいはその直後に、また結末に先行して、プロットが収束する際に起こる要素であり、しばしば「発見（認識）」に依拠するとされる。M. H. Abrams, *A Glossary of Literary Terms* (7th ed.; Fort Worth: Harcourt Brace College Publishers, 1999) 227. ある状態から別の状態への「転換・変化」が物語における出来事・事象となる。また、ある空間から別の空間への「転換」は登場人物が目的へと向かう移動によって生じることが多いが、これにより変化、解放、内省、知恵、知識などがもたらされることが予期される。M. Bal, *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative* (2nd ed.; Toronto: University of Toronto Press, 1997) 5, 137.

9　W. Brueggemann, *First and Second Samuel* (Interpretation; Louisville, KY: John Knox, 1990) 33.

10　Brueggemann, *First and Second Samuel*, 35.

11　A. F. Campbell, S.J., *1 Samuel* (FOTL 7; Grand Rapids: Eerdmans, 2003) 60f, 74.

12 P. D. Miller, Jr. and J. J. M. Roberts, *The Hand of the Lord: A Reassessment of the "Ark Narrative" of 1 Samuel* (John Hopkins Near Eastern Studies; Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1977) 28; Polzin, *Samuel and the Deuteronomist*, 57.

13 L. Eslinger, *Kingship of God in Crisis: A Close Reading of 1 Samuel 1–12* (Bible and Literature Series 10; Sheffield: Almond Press, 1985) 176.

14 Campbell, *The Ark Narrative*, 56.

15 D. T. Tsumura, *The first Book of Samuel* (NICOT; Grand Rapids: Eerdmans, 2007) 188.

16 J. P. Fokkelman, *Narrative Art and Poetry in the Books of Samuel: A Full Interpretation Based on Stylistic and Structural Analyses, volume IV: Vow and Desire (I Sam. 1–12)* (Studia Semitica Neerlandica 31; Assen: Van Gorcum, 1993) 247.

17 J. Blenkinsopp はギリシャ語の記述に従い、バアレ・ユダは場所の名前ではなく「ユダの人々」のことであると捉える。"Kiriath-jearim and the Ark," *JBL* 88 (1969) 152. キルヤト・エアリムはヨシュ15:60; 18:14ではキルヤト・バアル、ヨシュ15:9ではバアラと呼ばれている。これら二つはもともと近接した場所であったが、後に同一視されたのかもしれず、またサムエル記においてもキルヤト・エアリムとバアレ・ユダは同じ場所のことを指しているのかもしれない。A. A. Anderson, *2 Samuel* (WBC 11; Nashville: Thomas Nelson, 2000) 101.

18 彼らは三人の兄弟だったのかもしれない。P. K. McCarter, Jr., *II Samuel* (AB 9; New York: Doubleday, 1984) 169. そうでなければ、時間の経過によってこの違いを説明できるだろう。Gordon, *1 & 2 Samuel*, 33. あるいは、サム上の神の箱物語はサム下6章のそれとは伝承として異なる起源を持っているかもしれない。両者の語彙の類似はそれほど特徴的なものではなく、また前者においてはヤハウェと箱が主要な登場人物であるのに対し、後者ではダビデが主導権を握っている。この伝承の相違によって、上述した神の箱の安置場所の名前の違いを説明することも可能である。Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 33f.

19 Campbell, *1 Samuel*, 61f.

20 Miscall, *1 Samuel*, 26.

21 Tsumura, *The first Book of Samuel*, 159f.

22 Campbell, *1 Samuel*, 64.

23 Ibid., 67.

24 Miscall, *1 Samuel*, 27.

25 Brueggemann, *First and Second Samuel*, 32.

26 Tsumura, *The first Book of Samuel*, 195.

27 Campbell, *1 Samuel*, 67.

28 R. Alter, *The David Story: A Translation with Commentary of 1 and 2 Samuel* (New York: W. W. Norton & Company, 1999) 24.

29 Alter, *The David Story*, 25; A. G. Auld, *I & II Samuel: A Commentary* (OTL; Louisville: Westminster John Knox, 2011) 67.

30 ヤハウェの栄光（כבוד）はエリの命を奪うほどの重さ（כבד）と対比されている。Alter, *The David Story*, 26.

31 Alter, *The David Story*, 24.

32 Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 49; Campbell, *1 Samuel*, 61.

33 Tsumura, *The first Book of Samuel*, 203.

34 Brueggemann, *First and Second Samuel*, 37.

35 神の箱がダゴンのそばに置かれたのは、戦勝記念のトロフィーのようなものとしてであり、ヤハウェのダゴンへの従属を示す意味があっただろう。G. W. Ahlström, “The Travels of the Ark: A Religio-Political Composition,” *Journal of Near Eastern Studies* 43 (1984) 143; Fokkelman, *Narrative Art and Poetry* IV, 252; Alter, *The David Story*, 27; Tsumura, *The first Book of Samuel*, 204. サム上5:2では「ペリシテ人」が三つの動詞の主語であり、一方「神の箱」がその目的語となっており、この時点で彼らが主導権を握っていることが強調されている。しかし、このペリシテ人による神の箱の「操作」は、すぐに覆されることになる。Eslinger, *Kingship of God in Crisis*, 190.

36 Campbell, *The Ark Narrative*, 203; Polzin, *Samuel and the Deuteronomist*, 64. 神の箱の臨在がありながらもイスラエルは敗れ、神の箱自体も奪われたが、ヤハウェ自身がペリシテ人やその神に屈服したわけではなく、むしろイスラエルの敗北によって新しい状況を意図的に作り出している。

37 ダゴンが「倒れる」のにも、エリが自分の席から「落ちる」のにも、同じ動詞（נפל）のカル形が用いられている。

38 「ヤハウェの手」という間接的な形ではあるが、神の箱物語においてここで初めてヤハウェが行為者として現れ、主導権が完全にヤハウェにあることが強調される。

39 出エジプトのモチーフがここにも見られる。ヤハウェがエジプト人を疫病や腫れ物で打ったので最終的に彼らはイスラエル人を去らせたように、ここでヤハウェがペリシテ人を腫れ物で打ったので、ペリシテ人は自分たちの町から神の箱を去らせようとしている。Campbell, *The Ark Narrative*, 203f.

40 Brueggemann, *First and Second Samuel*, 35.

41 Miscall, *1 Samuel*, 31.

42 エジプト人も川の水が血になる災いで七日間苦しんだが（出エ7:25）、この「七」という数字は苦難の時が完了したことを暗に示しているかもしれない。R. W. Klein, *1 Samuel* (2nd ed. WBC 10; Nashville: Thomas Nelson, 2000) 56; Campbell, *1 Samuel*, 78; Tsumura, *The first Book of Samuel*, 213.

43 ここにも出エジプトのモチーフが見られる。ファラオが賢者や呪術師を召し出したように、ペリシテ人は祭司たちや占い師たちを呼び出した。また、彼らの助言は「なぜ、あなたたちは、エジプト人とファラオがその心を固くしたように、心を固くするのか」というものであった。Campbell, *The Ark Narrative*, 204.

44 Tsumura, *The first Book of Samuel*, 203f, 214.

45 Ibid., 217.

46 金の品と共に神の箱を送り出すということもまた、出エジプトのエピソードを思い起こさせる。ファラオはイスラエル人をその地から出て行かせたが、その時彼らはエジプト人から銀の品と金の品（כלי זהב）を求めた（出エ12:35）。金の品々はペリシテ人によって準備されたが、それらはここで実際には戦利品のように描かれている。Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 73.

47 Campbell, *1 Samuel*, 78.

48 Campbell, *The Ark Narrative*, 114.

49 Eslinger, *Kingship of God in Crisis*, 213.「ヨシュア」という名前は、イスラエルを約束の地へ導いた人物を想起させ、神の箱がイスラエルの地に戻ってきたことの重要性を暗に示している。

50 Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 75. ここにも出エジプトのモチーフが見られる。また、これはラハブの宣言にも比べられるかもしれない。彼女はエリコの女であったが、ヤハウェがエジプトで行ったこと、およびアモリ人の王たちに対して行ったことに触れ、「あなたたちの神、ヤハウェこそ、上は天、下は地に至るまで神であられる」と述べた（ヨシュ2:10f）。

51 Campbell, *1 Samuel*, 80; Tsumura, *The first Book of Samuel*, 221.

52 Miscall, *1 Samuel*, 33.

53 "It is probably not possible to restore the text with any certainty." Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 77. このエピソードが理解しにくいのは、いくつかの伝承から成っているからかもしれない。Campbell, *1 Samuel*, 81. Klein は七十人訳に従って「彼らがヤハウェの箱を見たとき」の前に「しかしエコニヤの子らはベト・シェメシュの人々と共に喜ばなかった」を読み、なぜヤハウェが彼らを打ったのかを説明している。*1 Samuel*, 54. 同様に McCarter は「しかし祭司は誰もベト・シェメシュの人々と共に祝祭に加わらなかった」を挿入するよう提案している。また彼は、「彼らがヤハウェの箱を『のぞきこんだ』とき」と訳することによって、祭儀的禁忌を犯したために打たれたと説明できるかもしれない、としている。*I Samuel* (AB 8; New York: Doubleday, 1980) 128, 131.

54 Miller and Roberts, *The Hand of the Lord*, 77; Tsumura, *The first Book of Samuel*, 227.

55 Eslinger, *Kingship of God in Crisis*, 223f; Campbell, *1 Samuel*, 81.

56 Campbell, *1 Samuel*, 81.「アビナダブの家」とは、それが彼に関係した個人的な聖所であることを示すのかもしれない（士師17:12参照）。Klein, *1 Samuel*, 60.

57 Eslinger, *Kingship of God in Crisis*, 226.

58 Campbell, *1 Samuel*, 84; Klein, *1 Samuel*, 61.

59 A. F. Campbell, S.J. "Yahweh and the Ark: A Case Study in Narrative," *JBL* 98 (1979) 33, 39. サム下6章の物語は、神の箱をエルサレムに運び入れるのは、ヤハウェ自身がそれを望むときに初めて可能になるということを強調している。

60 Ahlström, "The Travels of the Ark," 141f.

61 Gitay, "Reflection on the Poetics," 222.

62 Polzin, *Samuel and the Deuteronomist*, 60. エリが神の箱の喪失の知らせを受けるエピソード（サム上4:12–18）は、ダビデがサウルの死の知らせを受けるエピソード（サム下1章）とアブサロムの反逆に直面するエピソード（サム下15章）に比較されうるものであり、構造、語彙、テーマなどに類似点が見られる。Ibid., 60–64.

63 Ibid., 68. シロからキルヤト・エアリムの丘の上のアビナダブの家までの旅はペリシテ人の地での数ヶ月の滞在を挟んでおり、バアレ・ユダの丘の上のアビナダブの家からエルサレムまでの旅もガト人オベド・エドムの家（すなわちペリシテ人の所）での数ヶ月の滞在を挟んでいる。サム下6章の神の箱の旅においても、それを運ぶ人の都合ではなく、ヤハウェがその移動を左右するということが示されている。

64 Polzin, *Samuel and the Deuteronomist*, 66.

65 Ibid., 70f.

66 Ahlström, "The Travels of the Ark," 146–48; Gitay, "Reflection on the Poetics," 225f.

67 Ahlström, "The Travels of the Ark," 145.